

MMPI

D尺度におけるfakingの効果と項目のsubtletyとの関係

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1329

MMPI D尺度における faking の効果と項目の subtlety との関係

木 村 敦 子

(金沢大学文学部)

MMPI の尺度を構成する項目に対する回答の心理学的意味は、経験的に導かれたものである。それゆえ、ある項目に回答したときの心理学的意味が項目内容からは推測し難い項目も存在する。例えば、「すべての物事が聖書の予言者が言っているとおりになっている」に「あてはまらない」(false) と答えると抑うつ尺度得点に採点されることを推測するのは困難である。一方、「たいていいつも幸福である」に「あてはまらない」(false) と答えると抑うつに採点されることは比較的推測しやすいであろう。こうした項目特徴の次元は subtlety (隠微性) と呼ばれており、心理学的意味が推測しやすい項目は obvious 項目 (明瞭項目)、推測しにくい項目は subtle 項目 (隠微項目) と呼ばれている。

木村 (1987) は、D 尺度の 60 項目について、「true」, 「false」どちらの回答が抑うつ採点キーの側であるかを被検者に推測判断してもらい、採点キー側を正しく選んだ人が多い項目ほど obvious であり、少ない項目ほど subtle であると考えて、抑うつ尺度に関する subtlety の測定を行なった。また、正しく採点キー側を選んだ人が 50% に満たない項目を subtle 項目、50% 以上の項目を obvious 項目と、便宜的に分類すると、13 項目が subtle 項目、47 項目が obvious 項目と判定された。

subtlety の指標の取り方は研究者によって異なり、専門家が尺度ごとに分類判断したもの (Wiener, 1948)、正常者集団と病理集団の多数応答側が同じ側にあり、しかもその側が採点キーになっている項目 (zero 項目) を subtle 項目とほぼ同義であると見なすもの (Wales and Seeman, 1968)、非専門家が、「心理的問題点をあらわしている程度」を項目ごとに評定したもの (Christian, Burkhart, and Gynther, 1978) などがある。しかし、どの指標を用いた場合でも、被検者に意図的に偏った受検態度で検査を受けるように求めて faking (fake good と fake bad) を行なわせると、被検者は obvious 項目では意図した方向に回答を操作で

きるが、subtle 項目では意図した方向とは反対の側へ回答してしまうという現象が見出されている。例えば、人から良い印象を持たれるような方向に回答しようとする (fake good)、subtle 項目では意図に反して却って臨床尺度に採点される側へ回答することになり、悪い印象を持たれるような方向に回答しようとする (fake bad) 逆に臨床尺度に採点されない側へ回答してしまうのである (Wales and Seeman, 1968; Harvey and Sippelle, 1976; Burkhart, Christian, and Gynther, 1978)。Burkhart et al. (1978) は、subtle 項目では被検者が意図した方向と逆の結果になることを「逆説関係 (paradoxical relationship)」と呼んでいるが、本報告では subtle 項目における結果だけでなく、obvious 項目では被検者が意図した方向の結果になることも併せて、以後この現象を仮に「subtlety 現象」と呼ぶことにする。

本研究の目的は、先に報告した subtlety の指標 (木村, 1987) を用いて、「subtlety 現象」が見られるかどうかを検討することである。

方 法

被検者 金沢市内の女子短期大学の学生で、実験心理学の受講生 83 名と、4 年制大学の女子学生で心理学の受講生 162 名の計 245 名を被検者とした。このうち、短期大学生 42 名を含む 120 名を fake good 条件群 (以下 FG 群と略す) に割り当て、残りの 125 名を fake bad 条件群 (以下 FB 群と略す) に割り当てた。被検者の年齢の範囲は 18 歳から 20 歳までであり、平均年齢は FG 群が 18.7 歳 (SD = 0.58 歳)、FB 群が 18.8 歳 (SD = 0.57 歳) であった。

質問紙 MMPI 金沢大学版 (多田, 1959; 田中, 1964) の D 尺度 60 項目と L 尺度 15 項目、及びその他の項目 2 個を含む 75 項目 (D 尺度と L 尺度で重複する項目が 2 個あるため) から成る質問紙を用いた。これらの項目と採点キーを付表に示した。付表にはこのほか原版冊子式の項

目番号と、D尺度以外の尺度と重複している項目についてはその尺度名と採点キーもわかるように示した。質問紙の各項目の後にハイ・イエの選択肢を設け、上部には教示文を記載した。教示には、標準手続きの教示、fake good の教示、fake bad の教示の3種類を用いた。fake good 及び fake bad の教示はそれぞれ次のとおりである。

fake good の教示

「下記の文章を読んで、他人からできるだけ良い印象を持たれるように答えてください。実際の自分がどうであるかにかかわらず、非常に好ましい性質を持っているように見せかけてもらいたいのです。」

fake bad の教示

「下記の文章を読んで、他人からできるだけ悪い印象を持たれるように答えてください。実際の自分がどうであるかにかかわらず、非常に好ましくない性質を持っているように見せかけてもらいたいのです。」

手続き 質問紙の実施は、心理学もしくは実験心理学の授業時間の一部を借りて行なった。先ず全員に標準手続きで質問紙を実施した。次に、クラスのはほぼ半数には fake good の教示、残りのほぼ半数には fake bad の教示が記載された質問紙を配布し、回答を求めた。前者が FG 群であり、後者が FB 群である。被検者はそれぞれの質問紙を自己のペースで記入した。

結果と考察

subtlety 現象

各教示条件の被検者の回答をD尺度について採点し、その得点(D得点)の平均値とSDを、群ごとに表1と表2に示した。また、木村(1987)に従って、項目をsubtle項目(13個)とobvious項目(47個)に2分した場合の、それぞれのD得点(以下subtle得点、obvious得点と呼ぶ)の平均値とSDも表1と表2に同時に記載した。表からわかるとおり、標準手続き条件でのD得点はFG群もFB群もほぼ等しい。fake good条件では標準条件よりもD得点は有意に低くなり(平均値の差の検定: $t=17.817$, $df=119$, $p<0.001$), fake bad条件では有意に高くなっている($t=-5.813$, $df=124$, $p<0.001$)。しかし、D得点をsubtle得点とobvious得点に分けてみると、fake good条件では、標準条件にくらべてobvious得点は下がっている($t=19.143$, $df=119$, $p<0.001$)のに、subtle得点は上昇している($t=-5.728$, $df=119$, $p<0.001$)。また、fake bad条件では標準条件にくらべてobvious得点は上昇しているのに($t=-14.918$, $df=124$, $p<0.001$),

subtle得点は下がっている($t=26.056$, $df=124$, $p<0.001$)。つまり、自分を良く見せかけようとして回答すれば抑うつ度が低くなるが、それはobvious得点が減少するためであり、subtle得点は逆に増える。また、悪くみせかけようとして回答すれば抑うつ度は高くなるが、この場合も原因はobvious得点の上昇にあり、subtle得点は逆に減る。これらの結果から、いわゆるsubtlety現象が認められたといえる。

表1. FG群のD得点、及びsubtle項目・obvious項目に分けたD得点の平均とSD

	D 得 点	D得点の内訳	
		subtle得点	obvious得点
A. 標準手続き M S D	31.2 (T=52) 5.67	9.2 1.70	22.0 5.85
B. fake good M S D	20.5 (T=34) 4.52	10.3 1.70	10.2 4.31
AとBの r	0.174	0.314***	0.143

*** $p<0.001$ (N=120)

表2. FB群のD得点、及びsubtle項目・obvious項目に分けたD得点の平均とSD

	D 得 点	D得点の内訳	
		subtle得点	obvious得点
A. 標準手続き M S D	31.3 (T=52) 5.33	9.4 1.38	22.0 5.39
B. fake bad M S D	35.9 (T=61) 6.48	3.3 2.18	32.6 7.34
AとBの r	-0.093	-0.010	-0.076

(N=125)

標準手続き条件とfaking条件での平均得点の差を見ると、obvious得点は、FG群で11.8、FB群で10.6の違いがあり、両群がほぼ同程度の変化量を示している。一方subtle得点の差は、FG群が1.1、FB群が6.1であり、FG群の変化量はFB群の変化量にくらべて小さい(但し、前述したように、平均値の差の検定ではFG群の差も有意である)。FG群の変化量が小さいことには天井効果が影響していると思われる。ここでsubtle項目とした項目は13個であるが、被検者は標準手続き時に、既に平均9項目以上(約71%)をD採点側へ答えているのである。subtle項目はもともと正常被検者によって採点側が承認されやすい項目といえる。

標準条件でのD得点とfaking条件でのD得点の間には相関関係は認められず(相関係数の有意性検定によると、FG群; $t=1.919$, $df=118$, $p>0.05$, FB群; $t=-1.031$, $df=123$, $p>0.05$)、実際の自分がどう

であるかには関係なく faking 条件での回答がなされていたといえる。しかし subtle 項目, obvious 項目別に見ると, FG群の subtle 得点には有意な正相関がある ($t=3.594$, $df=118$, $p<0.001$)。標準条件で subtle 得点の高い(低い)人ほど fake good 条件での subtle 得点も高い(低い)訳であるが, この原因は明らかでない。

また, 各条件でのD得点の標準偏差をみると, FG 群では faking 条件のほうが標準偏差が小さくなっており, 人に良い印象を与える回答が被検者間で割合一致していることを表わしている。一方, FB群では faking 条件のほうが標準偏差が大きくなっており, 人に悪い印象を与える回答には被検者間で一定のパターンがないことを窺わせる。田中 (1981) によれば, Y-G 性格検査では faking 2 条件とともに, 全ての尺度で標準手続きに比べて標準偏差が小さくなることが指摘されており, 本結果との違いが検査の特徴によるものか, その他の要因によるのかの検討が今後必要である。

項目の subtlety の程度と faking 効果

subtlety 現象は, 項目を subtle 項目と obvious 項目という, いわば質的に異なる項目として分けて, それぞれの項目での被検者の得点から faking 効果を検討した場合に起こる現象であった。それでは subtlety を量的な, 程度を表わす指標によって捉えた場合, faking 条件下での回答と項目の subtlety との間にはどのような関係が見られるであろうか。一般に, 項目を obvious 項目と subtle 項目に2分するための決まった基準があるわけではなく, 本報告でも便宜的な分割点によって行なったことから考えると, subtlety 現象を生じさせている, obvious 項目と subtle 項目での被検者の回答方向の違いは, 項目の subtlety の程度の違いに基づいている可能性がある。即ち, fake good 条件では, 項目がより obvious であるほど, その項目では抑うつに採点される側への被検者の回答率(以後, Dキー側回答率と呼ぶ)が低く, 項目がより subtle であるほど, その項目のDキー側回答率が高いのではないかと予想される。また, fake bad 条件では逆に項目が obvious であるほどDキー側回答率が高く, subtle であるほどDキー側回答率が低いのではないかと予想される。ここではこの点を検討する。なお, 木村 (1987) が行なった抑うつ採点側の推定判断の実験において, 正しく判断した人の比率をその項目の適中率と呼び, 適中率を本報告の subtlety の程度の指標として用いた。(適中率の値は表4に示してある。)

それぞれの教示条件において, 各項目の subtlety の程度とDキー側回答率との積率相関係数を求めたところ,

表3. 項目のsubtletyの程度と各教示条件におけるDキー側回答率との積率相関係数

	FG群	FB群
標準手続き	-0.387**	-0.390**
faking	-0.727***	0.640***

** $p<0.01$ *** $p<0.001$

表3に示したような結果を得た。fake good 条件では負の有意相関があり ($t=-8.068$, $df=58$, $p<0.001$), subtlety の程度が低い (obvious) 項目ほど faking 条件でのDキー側回答率が高く, subtlety の程度が高い (subtle) 項目ほどDキー側回答率が低いという関係が認められた。これは予想と一致する結果である。fake bad 条件では逆に正の有意相関があり ($t=6.340$, $df=56$, $p<0.001$), obvious な項目ほどDキー側回答率が高く, subtle な項目ほどDキー側回答率が低い。これも予想と一致する結果である。

表3をみると, 標準条件においても subtlety の程度とDキー側回答率に有意な負の相関がある。(FG 群では $t=-3.193$, $df=58$, $p<0.001$; FB群では $t=-3.224$, $df=58$, $p<0.001$)。これは, 被検者の標準条件での回答が, subtlety の面から見ると中立ではなくて, fake good 条件での回答にやや近い形になることを示している。

項目の subtlety と条件間でのDキー側回答率の変化パターン

各項目のDキー側回答率(%)を条件ごとに表4に示した。ただし, 標準条件の結果は FG 群と FB 群を合せたものである。2群のD得点がほぼ等しいこと(表1, 表2参照), Dキー側回答率と subtlety の程度との相関係数もほぼ等しいこと(表3参照), さらに両群のDキー側回答率の積率相関係数を算出したところ0.98という高い正の相関が得られたことから両者をまとめても支障はないと考えたからである。また, 表4には subtlety の程度の指標(適中率)も一緒に記載してある。subtle 項目と obvious 項目に2分する際に subtle 項目と判定した項目は項目番号の右肩に*を付して示した(適中率が50%に満たない項目)。

一般には, fake good 条件と fake bad 条件では被検者の応答は正反対になることが期待される。実際に, FG

表4. 各教示条件におけるDキー側回答率と
subtlety測定における適中率

項目 No.	fake good	標準 教示	fake bad	Dキー 適中率	項目 No.	fake good	標準 教示	fake bad	Dキー 適中率
1	18	95	71	73	37*	83	76	8	9
2*	97	81	10	27	38	6	69	80	98
3	6	9	96	90	39	64	60	41	73
5	17	60	62	72	40	7	40	76	86
6	4	40	89	72	41*	94	97	16	12
7	38	45	54	72	42	6	58	78	90
8*	70	94	33	16	43	0	34	97	86
9*	43	69	53	31	46	50	79	26	88
11	97	49	2	55	47	12	69	73	91
12	2	11	94	87	49	1	13	86	99
13	25	45	58	88	50	2	11	85	53
14*	93	89	17	8	51	8	51	86	77
16	1	7	88	92	52*	67	79	42	13
17	3	27	85	95	53	42	52	49	81
18	3	51	87	91	54	29	58	56	51
19	15	53	84	66	55	19	65	74	98
20*	96	23	3	35	56*	79	29	50	3
21	12	34	81	91	57	11	12	81	93
22	3	20	90	95	58	16	44	79	62
24	8	74	83	97	59*	97	60	4	31
25	17	70	68	92	60	25	47	61	83
26	88	75	10	83	62	2	22	87	92
28	26	69	71	86	63	1	39	78	74
29	75	29	12	90	64*	70	46	28	20
30	9	51	83	93	65*	98	94	2	23
31	28	66	76	98	67	1	9	86	88
33	12	13	62	95	68	1	26	94	97
34	3	31	85	97	70	18	85	95	93
35	60	91	32	95	72*	41	93	67	41
36	58	67	41	76	73	75	74	28	79

* の項目は subtle 項目を表わす

(単位: %)

Dキー側適中率の欄は木村(1987)による

群の fake good 条件と FB 群の fake bad 条件にはDキー側回答率に-0.96という高い負の相関があり、faking 2条件のうち一方の条件でDキー側回答率が高い項目はもう一方の条件では低いという関係が見られる。標準手続き条件が、fake good 条件と fake bad 条件との中間に位置すると考えると、3種の教示条件でのDキー側回答率は good<標準<bad か、good>標準>bad というように系統的に変化すると予想される。obvious 項目では被検者は意図した方向に回答を操作できることから、Dキー側回答率は fake good 条件<標準条件<fake bad 条件という関係になり、他方 subtle 項目では被検者が意図した方向とは逆の結果がもたらされるということから、Dキー側回答率は obvious 項目とは逆に fake good 条件>標準条件>fake bad 条件となるのではないかと考えられる。そこで、3種の条件間で起こりうる変化のパターンを挙げて、各パターンに含まれる項目数を obvious 項目、subtle 項目別に表5に示した。なお、標準条件と faking 条件でDキー側回答率の差が5%以内のものは便宜的に、「等しい」(=)と見なした。

表5より、項目の分布が obvious 項目と subtle 項

表5. 各教示条件間のDキー側回答率の変化パターンと
それぞれのパターンに含まれる項目数

	obvious 項目	subtle 項目	計
① good < 標準 < bad	29 (62)	0	29 (48)
② good < 標準 = bad	6 (13)	0	6 (10)
③ good = 標準 < bad	3 (6)	0	3 (5)
④ good = 標準 = bad	0	0	0
⑤ good > 標準 = bad	0	0	0
⑥ good = 標準 > bad	2 (4)	3 (23)	5 (8)
⑦ good > 標準 > bad	3 (6)	5 (38)	8 (13)
⑧ good < 標準 > bad	4 (9)	4 (31)	8 (13)
⑨ good > 標準 < bad	0	1 (8)	1 (2)
計	47 (100)	13 (100)	60 (99)

アンダーラインは期待されるパターンを示す () 内は%

目とでは異なっていることがわかる。全体として最も多いパターンは、①の good<標準<bad であるが、このパターンに含まれる29項目は全て obvious 項目である。このパターンは obvious 項目が取るのであろうと予想したパターンであり、subtle 項目が含まれていない点で予想を裏付けている。subtle 項目が取るのであろうと予想した⑦の good>標準>bad のパターンは全部で8項目あり、そのうち5項目が subtle 項目(項目2, 20, 37, 59, 64)、3項目が obvious 項目である(項目11, 26, 29)。⑧のパターンを取る obvious 項目は、subtlety の程度から見ると subtle 項目に近いのではないかと考えられたが、この3項目の適中率はそれぞれ55%, 83%, 90%であり、obvious 項目の中での subtlety の程度が相対的に低い項目ばかりでもない。

その他のパターンのうち、⑨の good<標準>bad と①の good>標準<bad のパターンは変化の方向が系統的でなく、fake good 条件と fake bad 条件が両条件共に標準条件にたいして同じ側へ変化しているパターンである。⑨は8項目あり、obvious 項目(項目1, 35, 36, 46)と subtle 項目(項目8, 9, 52, 72)が4項目ずつ同数含まれるが、項目数に対する比率からいうと subtle 項目が相対的に多い。①は subtle 項目の1項目のみであり、項目56である。それ以外のパターンは=を含むものである。=を含むパターンを、系統的な変化に準ずる準系統的なパターンと見ると、④の good=標準=bad を境に⑥と③は①に、⑥と①は⑦に近いパターンといえよう。(但し、実際には④と①のパターンを示す項目はみられなかった。)特に、subtle 項目で①パターンに含まれる3項目中、項目41と項目65は標準条件でDキー側回答率が97%と94%あり、天井効果のために⑧パターンを取ることが事実上不可能であったと思われる。準系統的なパターンも合せて考え

ると, obvious 項目が取るであろうと予想したパターンには38項目が含まれ, 全て予想通り obvious 項目から成っている。subtle 項目が取るであろうと予想したパターンには13項目が含まれ, そのうち8項目が subtle 項目, 5項目が obvious 項目であるが相対的な比率から見ると subtle 項目が多いといえる。但し, =を含むパターンは系統的でない⑥や①に近いと見ることも可能であるから, このような分け方が妥当かどうかには議論の余地がある。

obvious 項目, subtle 項目どちらも予想と一致する変化を示す項目数が最も多いが, そのほかに subtle 項目では faking 2条件が標準手続き条件に対してどちらも同じ変化をする項目も多いことが目立つ。ちなみに, subtle 項目で⑥のパターンを取る4項目のうち2項目は?型(D採点キーの判断において?応答が多かった項目であり, 13項目中4項目がこの型, あるいはこの型に近い型である: 項目8, 14, 41, 52)であり, 2項目が等頻度型(D採点キーの判断において被検者の判断が true と false にほぼ2等分した項目であり, 13項目中4項目がこの型, あるいはこの型に近い型である: 項目2, 9, 20, 72)であった。?型と等頻度型はどちらも採点キーが推定しにくいときに生じやすいと考えられたが, faking の際の, 好ましさの判断についても同様に困難な項目であることを示していると思われる。①に含まれる項目56は翻訳と原版とでニュアンスが逆に受け取られやすいのではないかと考えられた項目である(木村, 1987)。この項目だけが good>標準<bad というパターンを示し, 他の項目とは異なった性質をもった項目になっている。⑥や①のパターンが生ずる原因には, 項目特徴や被検者側の, 様々な要因が絡んでいるのであろう。

結 び

MMPI のD尺度の項目について, 被検者に標準手続きでの回答と faking の回答を求め(fake good もしくは fake bad), 項目の subtlety が faking の効果にどのような影響を及ぼしているかを検討した。obvious な項目ではD得点は fake good 条件下で減少し, fake bad 条件下で上昇したが, subtle な項目ではD得点は fake good 条件下で上昇し, fake bad 条件下で減少した。即ち, obvious 項目では被検者は意図した方向に回答を操作できるが subtle 項目では被検者の意図した方向とは逆の側へ得点に変化するという現象が認められた。

subtlety の程度を指標にした場合には, fake good 条件下では項目が obvious なほど採点側への回答は少なく, subtle なほど採点側への回答が多い傾向があり,

一方 fake bad 条件では逆に, 項目が obvious なほど採点側への回答が多く, subtle なほど採点側への回答が少ない傾向があった。さらに, 標準条件下では fake good 条件下で見られた傾向と似た回答傾向があり, subtlety に関してみれば標準条件での回答傾向が中立ではないことが示された。

標準条件と faking 2条件での採点側への回答率のパターンは項目の subtlety によって異なり, obvious 項目では good<標準<bad が多く subtle 項目では good>標準>bad が多いといえる。しかし obvious 項目でも subtle 項目と同様の変化をする項目がある。この原因は subtlety の程度ではなく, subtlety の測定方法そのものにあると思われる。抑うつ方向がわかりやすいか, わかりにくいかの判断と, fake good 条件や fake bad 条件で求められる良い・悪いや, 好ましい・好ましくないの判断とは自ら異なっているからである。従って, faking の効果に関する subtlety の影響を調べたことを subtlety 研究の本題であるとするなら指標の取り方を変えたほうが良いのであろう。subtle 項目ではさらに good<標準>bad の項目も多く見られた。

faking の効果としては他に fake good 条件では標準条件にくらべてD得点の標準偏差が小さくなり, 一方, fake bad 条件では大きくなる現象が見られた。田中(1981)によれば, Y-G 性格検査では faking 2条件ともに標準偏差が小さくなることが指摘されており, 本結果との違いがどのような要因によるのかの検討が必要である。

(本研究に際して, 授業時間の一部を快く使用させて頂き, また学生諸氏に協力方をお願いして下さいました, 金沢大学教養部の多田治夫先生と大岸通孝先生に深謝いたします。協力していただいた学生の方々にも記して感謝いたします。)

参 考 文 献

- Burkhart, B.R., Christian, W.L., and Gynther, M.D. 1978 Item subtlety and faking on the MMPI: A paradoxical relationship. *Journal of Personality Assessment*, 42, 76-80.
- Christian, W.L., Burkhart, B.R., and Gynther, M.D. 1978 Subtle-obvious ratings of MMPI items: New interest in an old concept. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46, 1178-1186.
- Harvey, M.A. and Sippelle, C.N. 1976 Demand characteristic effects on the subtle and obvi-

ous subscales of the MMPI. Journal of Personality Assessment, 40,539-544.

木村敦子 1987 MMPIにおける抑うつ尺度項目の subtlety 測定の試み 金沢大学文学部論集 行動科学科編, 8, 印刷中

多田治夫 1959 MMPI邦語版の作成と大学生群の結果 金沢大学法文学部論集 哲学史学篇, 7, 137-172.

田中富士夫 1964 MMPI邦語版標準化の試み(中間報告) —MMPI金大版の改訂とその資料— 金沢大学法文学部論集 哲学篇, 12, 71-97.

田中富士夫 1981 Y-G性格検査における faking の効果 金沢大学文学部論集 行動科学科編, 2, 1-14.

Wales,B. and Seeman,W. 1968 A new method for detecting the fake-good responses set on the MMPI. Journal of Clinical Psychology, 24, 211-216.

Wiener,D.N. 1948 Subtle and obvious keys for the Minnesota Multiphasic Personality Inventory. Journal of Consulting Psychology, 12, 164-170.

付表 D尺度項目及びL尺度項目の内容、採点される尺度と採点キー、及び原版冊子式項目番号

項目No.	項 目 内 容	採点尺度と採点キーの方向		原版 No.
		true	false	
1	現在ほど体の調子よかったことはない	Ma D Pt,Sc	D K,Hy	160
2	すずしい日でも、すぐ汗をかく		D	263
3	気が狂わないかと心配している			182
(4)	ゲーム(勝負事)には負けるより勝ちたい		L	150
5	わたしの記憶力は、たしかなように思う		D Pt,Sc	178
6	ひとつの仕事だけに心を向けていることができないようだ	D Hy,Pd,Pt,Sc,Si		32
7	多くの人をなっとくさせるためには、うんと議論をしなければならない		D K,Hy,Mf	89
8	すべての物事が聖書の予言者が言っているとおりになっている		D	58
9	つけこまれるようなことをした人につけこんで利用したからといって、その人を非難しようとは思わない	Ma	D	271
(10)	選挙のとき、よく知らない人に投票したことがある		L	255
11	だれかをやっつけたくなることが時どきある	D F,Hs,Hy	D	145
12	むかついたり吐いたりすることがよくある			23
13	自分の健康についてめったに気にやまない	D	D,Pt	36
14	ぜんそくの気はない		Si	193
(15)	新聞の社説を毎日読むとは限らない		L	60
16	わたしは人並みに健康である	D,Pt,Sc	D Hs,Hy	51
17	読んだことが頭にはいらない			159
18	人生は生きがいがあると、いつも感じている	D,Pa	D	88
19	わたしは泣きむしだ			158
20	時どき悪口を言いたくなる		D,L,K,Hy	30
21	わたしは何をしても、はじめがうまくいかない	D,Sc D,Hs,Hy		259
22	時どき眼がさめて、ぐっすり眠れない			43
(23)	わたしはいつも本当のことを言うとは限らない	D,Pt	L	45
24	わたしの毎日の生活は面白いことでいっぱいだ		D,Hy,Pd,Pt,Sc	8
25	わたしにはたしかに自信が欠けている			86
26	異性といちゃついたりするのが好きだ		D,Si	208
(27)	時どき人のうわさ話をする		L	225
28	物事がうまくいかない時でさえ、これといった理由もなくとても幸福に感ずることがある		D,Pd	248
29	下品な冗談を言いあって楽しむこともある		D,L	285
30	雑念など浮ぶ間もなくすぐ寝つくことができる		D,Pt	152
31	わたしはとてとても考えこむたちである	D,Si		236
(32)	金を払わず映画館にもぐりこんでも、絶対に見つからなければ、わたしは多分そうするだろう		L	135
33	食欲はおう盛である		D,Hs,Hy	2
34	大抵いつも幸福である		D,Hy,Pd,Pa	107
35	人から批判されたり悪く言われたりすると、ひどくこたえる	D,Si	K	138

36 仕事をする時、とても緊張する	D, Ma		13
37 人に言わないでおきたいような夢をよく見る	Sc	D	241
38 わたしは交際じゃうずだ		D, Si	57
39 人並みに幸福だったらいいのと思う	D, Pd, Pt, Si		67
40 自分が人一倍神経質な方だとは思わない		D	242
41 吐血したり、かっ血したりしたことはない	D	Hs	130
42 以前より判断力がよくなっている		D	46
43 久しく会わなかった人には向うから話しかけられない限り、知らぬふりをしてやりすごす	D, Sc		52
(44) 自分の家では、よそに行った時ほど食事の行儀がよくない		L, Mf, Ma	120
(45) 名士と知り合いになると自分も偉くなるような気がするので、そんな人たちと近づきになりたい		L	165
46 わたしは人並みに能力もあり美しいと思う		D, Pt	122
47 時どき体のすみずみまで力がみなぎる		D, F, K	272
(48) その日のうちになすべきことを翌日までのぼすことがある		L	90
49 いつも体が弱っているように感ずる	D Hs, Hy, Pt		189
50 発作（ひきつけ）を起こしたことはない		D	154
51 便秘して困るようなことはほとんどない		D, Hs	18
52 キリストの再臨（もう一度この世に現われること）を信ずる		D	98
53 これといった理由もないのに、非常に愉快になる時がある		D, K, Pd, Si	296
54 他人がしんぼうしきれなくなるほど、一つことにねばっていることがよくある	Ma	D	64
55 時どき、自分は何の役にも立たない人間だと思う	D, Pt	K	142
56 わたしはどんなことが起こっても大して心配しないようだ	D Sc		104
57 ちょっとした音ですぐ眼がさめる	D		5
58 人がやろうとしていることに横やりをいれたことはあるが、それは物事の筋を通すためにしたことと他意があったからではない	Ma	D	233
59 時どき物をぶちこわしたくなる		D, K	39
60 病気にかかりはしないかなんて心配しない		D	131
(61) わたしは時どき怒る		L, F	75
62 ここ数年間、わたしは大体のところ体の具合がよい		D, Hs, Hy	153
63 今のところ体重は減りもせずふえもしない		D, Hs, Pd	155
64 まごついた時に汗が出る		D	191
65 時どき動物をいじめる		D, Mf	80
(66) 知っている人はみんな好きだとはいえない		L	195
67 わたしはこれまでと変りなく今も仕事ができる		D, Hs, Hy	9
68 いろんな種類の遊びやレクリエーションを楽しんでやる		D	207
(69) 口にも出せないような悪いことを考えることがある	Pa, Pt, Sc	L	15
70 事がうまく運ばないので、何もやる気がしない時があった	D, Pt, Sc		41
(71) 気分がすぐれないと、むしゃくしゃする		L, Ma	105
72 お寺や教会などによくお参りに行く		D	95
73 外出時、戸じまりなどよくしたかどうかを気にするようなことはない		D	270
(74) 自分のことなのに、自分で何とかしようという気が起こらないことがある	(D, Sc)		104
(75) 物音で眼がさめやすい	(D)		5

番号を（ ）で囲ってある項目は本研究で扱っていない